

# 天使の街 ～マヨ～

サンプル

夜見野レイ

キャラクターデザイン・イラスト

ミナセ

ぎゃふん工房

もくじ

登場人物

4

プロローグ 7

第一部 ナツミ 15

第1章 郡上八幡ぐじょうはちまん

第2章 汐留と横浜しとめ

第3章 雄蛇ヶ池おじやがいけ

16

第二部 マヒル

第1章 麗宝学園れいほう

第2章 心霊研究クラブしんれい

第3章 幽霊マンションゆうれい

第三部 麗宝祭

第1章 殲滅せんめつ

第2章 餌食えじき

エピローグ

第3章 降霊術こうれい

参考文献

95

『天使の街～マヨ～』製品版のご案内

96

## 登場人物

- ◎マヨ……………高校教師をめざす大学生。この物語の語り手
- ◎ナツミ……………岐阜県・郡上八幡にある旅館の娘
- ◎サキ……………スピリチュアルカウンセラーのお手伝いをしている中学生
- ◎ヤヨイ……………私立麗宝学園高等部の3年生
- ◎ハルカ……………同2年生
- ◎マヒル……………同3年生。心霊研究クラブの部長
- ★
- ◎ミライ……………謎の集団（へでもんず）のメンバー
- ◎コユキ……………同メンバー
- ◎ウララ……………同メンバー
- ★
- ◎タカコ……………スピリチュアルカウンセラー
- ◎キヨコ……………エステティシャン
- ◎フユミ……………ナツミの姉

◎ヒデオ……………霊能力者

\*このサンプル版に登場するのは、マヨ、ナツミ、フユミの3人です。そのほかのキャラクターの活躍はぜひ製品版でお楽しみください。

# プログラマー

あの夏も、私は岐阜県・郡上八幡を訪れた。

駅から15分くらい歩いただろうか。ふとチョロチョロと水の音がするのに気づいた。大通りから少しはずれると、車の喧騒から解放され、街の中を流れる小さい川の心地よい音が耳に入ってくる。

郡上八幡が「水の街」と呼ばれていることは、旅行雑誌で読んだ。こんなふうの住宅地でも、水の音が聞けるとは思っていなかった。

水の流れる音がさらに大きくなった。目の前に堤防のようなものが見える。心なしか早足になった。

堤防の階段をのぼると、目の前に大きな川が現れた。長良川の支流・吉田川にやってきたのだ。

私が立っているところは、コンクリートで整地されている。しかし、むこう岸はほとんど自然のままの姿で、大小の岩が転がり、緑が生い茂っていた。遠くから子どもたちの嬌声が聞こえる。水遊びをしているらしい。川べりにはあざやかな色のテントも張られている。そのむこうにそびえる山の頂上には、お城が建っていた。

——へへ。あれが郡上八幡城かあ。

非日常的な空間の出現に、気分が盛りあがる。私は無意識のうちに足を踏み出し、川のほうへおどりていった。

近くで見る川は、またちがった味わいがあった。水は複雑にうねりながら流れていく。太陽の光が水面に乱反射して、美しい芸術作品のように見えた。

ふと——。

吉田川に深さように人工の川がつくられているのに気づいた。といっても、川幅は1メートル、深さはたぶん50センチぐらい。川というより溝というべきかも。でも、きれいな水が勢いよく流れる立派な「川」だと、私は思う。

上流へ目をやると、遠くのほうに女の子の姿があった。

この小さい川のへりに腰かけて、両足を水に浸っている。そうやって涼をとりながら、本を読んでいるのだ。

中学生か高校生かな？ 髪は肩にかかるぐらい。服は白いワンピースのように見える。

——あら？ 可愛い。

そう思った。絵画のような光景だった。知らず知らずのうちに、(カメラ)を起動していた。この場面を画像に残しておきたい。一方で、あのコに悪いかも、という罪悪感もあった。これだけ離れていれば本人は気づくはずもないし、まして相手は本を読んでいる。

——どうしよう？ 撮る？

目の前に(カメラ)の画面があった。いつの間にか撮影する体勢になっていた。

〈カメラ〉をかまえているのはだれ？ 私？ 私だよな？ 撮るのはいけない、あのコに失礼と思っているのに……。撮りたいのは私じゃない。いや、撮りたいのは私で、撮ろうとしているのは私じゃない。もう。なにがなんだかわからない……。

——あ、あれ？

画面の異変に気づいた。

あの少女のまわりにはだれもいなかったはず。

でも、画面には少女のほかに、ふたつ人影が映っている。

〈カメラ〉をいったんおろす。

やはり少女しかない。

もう一度かまえる。

人影は女の子の頭の上にある。

人影——というのがそもそもおかしい。そんな人間はいない。

〈カメラ〉をおろす。やはり少女以外になにも見えない。

またかまえる。人影のようなものは消えている。

見まちがい——と思うしかないよね、この場合。

一方で、あの少女を撮影するのをためらっている自分がいた。

撮ってはいけない。そんな気がする。

なぜ？

あのコに失礼——というのとは、ちがう。

さっきはたしかにそう思ったけども、いまはそうじゃない。

写真を撮れば、よくないことが起こるのではないか……。

理由はわからない。

——ひょっとして、あの少女はこの世の者ではないのかも……。

え？ なんてそんなことを思う？ いくらなんでも、あのコが幽霊だなんて……。

——たしかめれば？

もうひとりの自分が言う。そうだよ、実際にそほまで行ってたしかめれば万事解決。

——ほんとうに幽霊だとしたら？

いい思い出になるんじゃない？ 友だちへの土産話にもなるし。

——幽霊かどうかたしかめるなんて口実で、ほんととはあのコの顔が見たいんでしょ？

ちがう！ ……幽霊かどうかたしかめるついでに、顔が見られるというか……。

考えがまとまらないうちから、一步を踏み出していた。もう歩きだしてしまったのだから、いまさらやめるわけにはいかない。そんなわけのわからない言い訳を自分にしてきた。

女の子は私が歩きはじめるタイミングを見計らったように本をとじた。ブックカバー

の赤い色が目に飛びこむ。

——気づかれた!?

だからといって、立ちどまるのはおかしい。それじゃ、なんかやましいことをしているみたいじゃない?

女の子はそばに置いてあったトートバッグに本をしまった。代わりに手帳らしきものを取り出し、ページをめくっている。

だれかが自分に近づいてくる——のが女の子にもわかる距離まで来ている。でも、少女は意に介さない。手帳を読んでいるから、私からは顔が見えない。

——ダメか……。

なにがダメなの? もう幽霊じゃないことがわかったでしょ? それでいいじゃない。女の子が顔をあげた。

目が合った。

心の準備ができていなかったので、私はたぶん驚きの表情を浮かべていたと思う。

女の子が微笑んだ。

その瞬間、体のなかを風が吹きぬけたような感覚が襲った。

——なに? どうなったの?

女の子はしばらく私の顔を眺めていた。

へおねえさん、さっきからあたしのこと見てたでしょ

心が見透かされてしまったようで不安になる。

少女はなにも口にはせず、また自然に手帳へ視線をおとした。

女の子のそばをとおりすぎる。歩調はゆるめられない。お腹になんともいえない不快感を覚えながら、ゆつくりと少女から離れた。

激しい運動をしたわけでもないのに、心臓の鼓動が異様に速くなっていた。十分に距離をとったと思うところで、振りかえった。

少女の姿は消えていた。

# 第一部 ナツミ



## 第1章 郡上八幡

天使の街～マヨ～

1

〈郡上八幡旧庁舎記念館（観光案内処）のテラスにあるイスに腰かけ、吉田川を眺めながら、おだんごを頬張っていた。〉

時刻はお昼どき。当初の計画では、昼食には鰻を食べる予定だった。吉田川の清流で育った鰻の味は格別だという。しかし、気がつくとき、なぜか（みたらしだんご）を6本も買いこみ、ここに座っていたのだった。

頭のなかはつきさつき見た光景で占められていた。

満面の笑みの少女。画面に映りこんだ奇妙な人影。それが頭から離れない。

不思議というか、尋常でない出来事だと思ふ。異境の地にやってきたという昂揚感が妙なモノを見せているの？ あるいは、疲れて頭が働いていないのか……。

——少し早いけど、旅館へ行こう。

そう決心した。

郡上八幡の見どころはまったくまわっていない。ただ、今日泊まる予定の旅館のサイトに「美人女将による観光案内つき」とあった。「美人」というところにひっかかったわけだけど、まあ、美人といっても、ずっと年長の女将さんなのだろうな。それでも、地元の人に案内してもらおうのは、とても有意義な気がする。うん。善は急げ。さっさと旅館へ向かおう。

○

大きな看板が見えたので、旅館の場所に迷うことはなかった。和風の情緒ゆたかな建物ではあるけど、古さを感じない。

玄関に近づくと、なかから箒を持った中年の女性が出てきた。

「こ、こんにちは。今晚お世話になります」

「あら？ ようこそ。早いわねえ。もう街を見てまわったの？」

女性は一瞬驚いたような表情を見せたけど、すぐに愛想のよい言葉を返してきた。この人が「美人女将」なのかな？

「あの……まだ早かったですか？」

「いいの、いいの。さ、どうぞなかへ。あそこで記帳をお願いしますね」  
女将さんは館の奥のほうを指ししめした。

「失礼します……」

そこは純和風と叫ぶたつたたずまいの玄関になつていた。

昼間なので灯は点いておらず、少し薄暗い。壁や柱には高級な木材が使われているみたい。重厚な色合いが空間全体の暗みを増すのに一役買っている。さらに一歩なかへ入ると、ひんやりとした空気が肌に触れた。もちろん、冷房が利いているわけじゃない。風が建物のなかを吹きぬけ、熱気を外へ逃がしているという感じ。

靴を脱いで、下駄箱へ入れる。目の前に小窓があり、そこが受付になつているようだ。でも、人影はない。

「こ、こんにちは！」受付の奥までとどくように、声を張った。

「あれ？ おかしいわね」女将さんが玄関の掃き掃除を中断し、こちらに近づいてくる。

「フユミくっ、お客さんだよ」

「は〜い」なかから若い女性の返事が聞こえた。

声の主はすぐに現れた。半分は眠っているようだった私の頭が、その瞬間、にわかには働きたした。

——美人。

その形容が少しの疑問もなしにあてはまるような容姿だった。

「あ……」思わず小さい声を漏らしていた。「あの……お世話になります」

「ようこそ。この旅館の女将です」

「え……女将？ さっきのかたは……？」

「あれは母です。大女将ですね」

この人が女将さん？ 失礼ながら、女将さんという風情の人ではないと思う。なんか、この和風の旅館に似つかわしくないというか……。ナチュラルメイクだけど、目鼻のつくりがはっきりしている。口紅だけがやけに赤いのが印象的。有名企業の社長秘書といったオーラを感じさせる。Tシャツにジーンズというラフな格好だけど（それもこの旅館のイメージにそぐわない）、スタイルがいいだけに、妙に似合っている。歳は30ちよつと前といったところ？

フユミさんにうながされるまま、記帳をした。

——美人女将って、この人のこと？

うん。きつとそうだ。だがどう見ても美人だし。ということは、この人に観光案内してもらえらつてこと？

帳面に目をおとしながら、口元がほころぶのが自分でもわかつた。

「あの……『観光案内』を申し込んだんですけど……」

「はい。うけたまわ承つています。どうします？　すぐに出発されますか？　それとも、少しお休みにになりますか？」

「すぐに行きます。はい、いますぐに」はやる気持ちをおさえきれず、変な言葉づかいになった。フユミさんが小さく「くす」と笑ったので、恥ずかしくなってしまうた。

荷物を置くために、フユミさんが部屋まで案内してくれた。入口の戸は木の格子になつていて、その奥にもう一枚ふすまがある。そこを開けると、なかの畳が見えた。中央にちやぶ台。その上にポットや湯呑みなどの「お茶セット」がのつている。壁際に小さいテレビがあり、まさに和風旅館といった趣。部屋の隅に置かれた盛り塩もそれっぽい雰囲気醸し出している。

特筆すべきは、窓からの景色だ。この旅館は川に隣接していて、せせらぎが部屋のかまで聞こえてくる。岸に生える緑と水面の色彩のコントラストもいい。

このまま眺めていたいけど、観光もしたい。なんとという贅沢な悩み。

受付でフユミさんに声をかけた。さつきはまだチェックインの時間ではなかったから、ラフな格好をしているのかと思つたけど、Tシャツ、ジーンズのままで。顔だちの印象とは裏腹に、じつはざつくばらんな性格なのかな？

「これ、どうぞ」フユミさんから小さい団扇をわたされた。「外は暑いから」

団扇には〈郡上おどり〉という文字が書かれ、浴衣姿でおどる女性たちが描かれている。た。

「あの……今日も盆おどり、やるんですよね？」

「ええ。毎晩おどりがあるんです。いまはお盆だから朝まで」

「朝まで!？」

この街の最大の見どころは〈郡上おどり〉と呼ばれる盆おどりだ。7月中旬の「おどり発祥祭」から9月初旬の「おどり納め」まで、2か月33夜にわたって、盆おどりが繰りひろげられる。盂蘭盆会（お盆）の時期には〈徹夜おどり〉といって、午後8時ごろから翌朝5時ごろまでずっと催しがつづく。

「もちろん、マヨさんもおどるでしょ？」

「は？」フユミさんからいきなり下の名前を呼ばれ、不意を突かれた。

「そうしたいんですけど……浴衣を忘れてしまって……」

「大丈夫。浴衣はレンタルしますし、ふだん着でも全然かまわないですよ。そうだ! あとで〈おどり教室〉に参加したらどう？」

おどりの教室まであるの？　うん。興味がわいてきた。やっぱりおどろうかな。せつかく来たんだし。友だちにおどりがたを教えたりして、優越感を味わうのもいいかも。

私も女子のなかでは背は高いほうだけど、フユミさんは私よりさらに身長があった。友だちはみんな小柄だから、自分より大きい人と歩くのは変な気分。

道を歩いていると、ちらほら浴衣姿の人が目につくようになってきた。この時期は、その格好のほうかふだん着なのかも。ますます浴衣を忘れてきたことを後悔する。せっかくお気に入りの逸品を買ったのに……。

「これが〈郡上おどりの像〉です」

街の片隅に、頬被りをしておどっている姿の銅像があった。

「盆おどりのルーツって知ってる？」

「ルーツ……？ 先祖の霊を迎える儀式とか？」

「盆おどりはね、もともと恋人を見つけるためのイベントなの。現代でたとえるとお見合いダンスパーティーみたいなものかな」

——え……そんなロマンチックなものなの？

「マヨさんみたいに可愛い人は、ひくてあまたになるんじゃない？」

フユミさんの手が私の肩に置かれる。そのまま優しく滑るように、指が私の二の腕へ移動する。そっと撫でてから、ゆっくりと手を離れた。

思わず身震いする。心地よさを感じてしまった自分に驚いた。

「え？ そんな……。そんなことありません……」取り繕うように答えた。

その言葉は本心だった。私はいつも片思い。相手が振りむいてくれることなんてない。ここへ来てからそのことは意識にのぼらなかつた。いや、あえて考えないようにしていた。フユミさんのひとことで自分のみじめさが思い出されてしまった。

盆おどりが始まったころの大昔に生まれていればよかった。公然と出会いの場が設けられていたのだから。いや、私はそんな時代でも、取りのこされてしまうのかも……。

「あの……ほんとにそういうことするんですか？ 相手を見つけて……そのあと……」

「ふふ。マヨさんもお年ごろねえ。いまはふつうのおどりのイベントですよ。もちろん、望むなら相手を見つけてもいいけど。それは自由なんだし」

半分は残念に思い、もう半分は安堵した。期待をするぶんだけ、裏切られたときに絶望が深くなる。ならば、最初から期待しなければいい——。

ピピピピピ。

突然、音がした。〈電話〉の着信音に聞こえた。その音で我に返った。

「あ、ちよつとごめんさい」フユミさんが〈電話〉を取り出しながら、頭をさげた。

「いいですよ」私はそう言いながら、フユミさんから顔をそむけ、目頭に指をあてた。知らない間に涙がたまっていたらしい。

「ちよつと、いまご案内中。電話しないでついても言ってるでしょ！」

フユミさんの口調がきつくなる。これは少し意外だった。なんとなくおちついていてイメージがあったけど、実際はちがうのかな……？

「じゃあ、ナツミにやってもらうしか……」

フユミさんは手早く「電話」をしまうと、つくり笑顔——さっきまでの強い口調からそう思えた——を私に向けた。

「ほんとうに申し訳ありません。ちょっとトラブルがあつて、旅館にもどります。このあとは妹がご案内しますから」

「あ、大丈夫です。気にしないでください」

電話の相手は妹さんだったらしい。これは想像だけど、姉妹の仲はあまりよくないのでは？

「ほんとにごめんなさい」

私はかえって恐縮しながら、フユミさんのあとを歩いた。

〈郡上おどりの像〉から10分ほどの距離だった。小道に入り、地面が石畳になつているところに出た。目の前は急な下り坂だった。

坂道をおりると小さい橋が見えた。アーチ状で、中央が盛りあがつている。深紅の欄干が独特の雰囲気醸し出している。橋の下に細い川が流れているようだ。

橋の真んかに人がひとり立ちすくんでいた。

顔を見て、私は息を飲んだ。

さつき出会ったあの少女だった。

## 2

少女はじつとこつちを見つめていた。顔は笑っていなかった。かといつて、憂い顔というわけでもない。強い意志を内に秘めているという感じ。

橋の上にいるのはその女の子だけだった。いや、だけだったと思う。ほかの人は目に入らなかつたから。

私たちが近づいていっても、そのコは表情を崩そうとはしなかった。むこうから近づいてくるそぶりも見せなかつた。

フユミさんが少女に声をかけ、なにかを話していた。

「マヨさん。ほんとうにごめんなさいね。あとはナツミがご案内しますから」

フユミさんは、頭をさげると、足早にその場を去つていった。

フユミさんの妹——ナツミと私はしばらくそこに立ち尽くしていた。ふたりの間に気まずい沈黙が流れた。

フユミさんの妹だから美形だとは思ふ。しかし、お姉さんとちがつて愛嬌がない。

「……さつきは、どうも……」沈黙に耐えきれず私は口火を切った。  
「さつき……？」

「あ、いや、先ほどお会いしましたよね？ あそこの川で……」  
「川……？」 ナツミはほんの少しだけ顔をしかめる。

別人なの？ 白いワンピースの少女とは……。あらためてナツミを見ると、顔はそっくりだけど、服がちがっている。それに川では中高生くらいに思えたのに、目の前に立っているのは私とおなじくらい歳の女にも見える。

——もって笑ってくれたらはつきりするのに。

頭に焼きついているのは、満面の笑みだ。ナツミの笑顔を見れば、人ちがいかどうかわかる。

「そうごすい……」 ナツミが唐突に口を開いた。そして、私の後方を指差した。それにつられて振りかえると、視線の下に、小さい水路。その先に注連縄が飾られた祠のようなものがある。

「宗祇水は、1985年に、環境庁が、名水百選に選んだわき水で……」 またしてもナツミが突然しゃべりはじめた。「室町時代の……えっと、あの……」

「ひよっとして、緊張してる？」

「え……？ すみません……まだ慣れていなくて……申し訳ありません」 ナツミが深々

と頭をさげた。そのしぐさはフユミさんにそっくりだった。

「ぶっ」思わず吹き出してしまった。「あつ、ごめんなさい」

「わたしのほうこそ……美人女将の観光案内なのに……姉がでなくなってしまうて……」

「いや、でも……女将さんじゃないけど、美人には変わりないから……」

自然に出た言葉だったけど、言ったあとに「はっ」となった。社交辞令のつもりだったのに、ほんとうに美人だと思っただけに、気恥ずかしくなってしまったのだ。

「いや、そんなことはないです……」 ナツミが小さい笑みを浮かべながら、そっぽを向く。その顔を見るかぎり、ますます川べりの少女にしか思えないんだけど……。

「えっと……」 ナツミはおもむろにバッグから手帳を取り出し、ページをめくりはじめた。

「私はマヨです」

「え？」

「いま私の名前を探してたんじゃない？ その手帳にメモしてあるんでしょ？」

「あ……すごい、よくわかりましたね」

「昔からそういう勘は冴えてるの」

「よろしくお願いします。マヨさん」

「マヨでいいよ」

それを聞いたナツミが呆気にとられている。

「あ、その……たぶんナツミさんは私と歳が近いから、友だちみたいな感覚で案内してもらったほうが、気がラクというか、そのほうが楽しいっていうか……」

「……じゃあ、わたしもナツミって呼んで……マヨ？」

「わかった、ナ……ナツミ？」

私たちはしばらく顔を見合わせ、そして笑いはじめた。

「あ……こんなことしてちゃダメ……お仕事しないと」ナツミがにわかにな顔になった。もつとナツミのことを知りたい気持ちもあつたけど、それはあとのお楽しみにしてもいいかな。

「はい。じゃあ、お願いします」

「近くに行ってみよ？」

ナツミのあとについて階段をおりていく。

祠からわき水が出ていて、幅1メートルぐらいの溝みぞを流れている。その水は橋の下を流れる細い川に注いでいた。

「宗祇水の宗祇ってなに？」

「室町時代の飯尾宗祇いのおとうぎっていう歌人のこと。その人がここに庵いおりをつくつたのが由来とさ

れている」

「へー。たしかにこの街の水はきれいだよね」

ナツミが浮かない顔をしている。私といるのが楽しくないのだろうか……。

「マヨ……お姉ちゃんから変なこと聞かされたかった？」

「変なことって……？」

「盆おどりが出会いの場だとかなんとか……」

「うん、聞いたよ。お見合いダンスパーティーみたいなものだって」

「そんな生やさしいものじゃないよ。もつと、なんとというか、おぞましいもの」

「……だって、ただおどるだけでしょ？」

「なんのためにおどるか知ってる？」

ナツミの表情はさらに強張おぼっていた。なぜそんな顔をしているのか、まったく理解できず、不安になった。

「なんのためって……そのほうが盛りあがるじゃない？」

「おどりはね、自分たちをトランス状態にするため」

「それって、興奮状態ってこと？」

「ようするに、えっちな気分になるためだよ」

ナツミの口から「えっち」なんて言葉が出ると、なんでもない単語なのに、妖あやしく響ひび

いた。

「お姉さんはいまはそんなことないって……」

「でも、一部にはそういう風習が残ってる」

私はこのあと〈おどり教室〉に参加する予定であることを思い出した。

「盆おどりには行かないほうがいいってこと？」

「いや……それはいいと思うよ。この名物だし、想い出にはなると思う。でも、わたしの言いたいのは『気をつけて』ってこと」

「なにに気をつけるの？ ひよっとして、私がナンパされちゃうとか思ってる？ 言っとくけど、そんな軽い女じゃないわっ！」

ふたりの間に流れていた重苦しい雰囲気を変えたくて、あえておどけた口調で言ってみた。ナツミが表情を崩す。

「たしかに、マヨはモチそうだしね……それだけの、あれだもん」

「あれ？」

「綺麗ってこと」ナツミは早口でそう言うと、下を向いた。私たちはお互いに「美人」「綺麗」と言いあつては、頬を赤らめているのだった。

その気恥ずかしさを打ちつけたかった。いや、好きなコにちよつといたずらをしたくなる子どものような気持ちになった。

わき水に静かに片手を浸け、水をすくうと、それをナツミの頭に振りかけた。

「えいっ」

「ひいっ」

ナツミが驚きのあまり悲鳴を放った。立ちあがって、急いで私から離れる。頭をかきむしるようになって、水を払おうとしている。

「ごほ、ごほ、ごほ、ごほ」

ナツミがむせて、苦しみはじめた。私はナツミに近づき背中をさすった。

「ごめん。そんなにびっくりするなんて……」

セキはおさまったけど、まだ苦しそうに胸をおさえている。

「……この水って……毒なの？」

ナツミがふうっと、大きく息を吐いた。少しおちつきを取りもどしたようだ。

「水はなんでもない……髪が濡れるのが……」

「髪……？」

ナツミはなにかの病気ののだろうか。アレルギーとか？

「ここでは……髪を濡らしてはいけないの」ナツミがようやく顔をあげ、私のほうを見ながら答えた。

「どういふこと？」



「こんなこと言っても信じてもらえないと思うけど……」  
 ナツミがなにかを考えこむように下を向く。私はその様子を緊張した面持ちで見ている。

「やっぱり、ダメ。こんなこと話したらお姉ちゃんに叱られちゃう」

ナツミがなにを言いたいのかはまったくわからなかったけど、興味がわいてきた。  
 「お姉さんには絶対言わない。だから教えて」

ナツミは答えなかった。私の顔をじつと見つめている。私に話すかどうか迷っているみたいだった。

「ねえっ！ なんなの？」自分でも嫌になるくらいきつい口調になってしまった。

ナツミが意を決したように口を開いた。

「来て」

○

ナツミは私の存在を忘れたかのように進んでいく。あとをついていくのに、駆け足気味に歩かなければならなかった。向かっているのは、街の東側にある八幡山の方角。郡上八幡城が頂に見えた、あの山だ。

——ねえ、どこに行くの？

そう話しかけたかつたけど、ナツミが全身から発してる雰囲気がそうさせなかった。宗祇水のそばに立っていたときとおなじ堅苦しい顔つき。それがいまま感じられる。

ふもとから山道を歩く。このままお城まで行こうというの？

私たちはせまい道を入っていった。舗装されていないところを見ると、地元の人しか使っていないのかも。

5分ほど進んだところで、ナツミが唐突に立ちどまった。傍らに小さな祠が見える。ほんとうに小さい。高さは1メートルほど。かなり古いものだと思われる。

「ねえ、なにこれ？」

話しかけづらい雰囲気はいかかわらずだったけど、重苦しさに耐えきれなかった。「ここも郡上八幡の観光スポットなの？」

「いいえ。ここには地元の人もほとんど来ない」

ナツミが祠を見つめたまま答える。

「ここに祀られているのは〈テンシ〉と呼ばれるもの……」

「天使？ ……あの羽の生えた？」

「羽は生えてない。白い服は着てるけど……」

「この街に天使がいるって、なかなか面白い組みあわせだよ。ミスマッチというか、そ

れが逆に情緒じじょうがあるというか……」

「〈テンシン〉のことは知っている人は、この街にもほとんどいなくなりました。わたしの家の人たちと、あとは何人かのご老人だけ」

「なんかもつたいないね。せつかくの伝統が受けつがれてないんだね」

「わたしはね、正直、こんな伝統なくなってしまうばいいと思ってる」

「え？」

「マヨに水をかけられたとき、わたし、すごく驚おどろいたでしょ？」

「そうだ。そのことをすっかり忘れていた。ナツミが水を異様に怖がる理由を知りたかったのだ。」

「水が髪にかかるよね、寄ってくるのよ、〈テンシン〉たちが」

「寄ってくる？」

「ねえ、お風呂で髪を洗っているとき、だれかの視線を感じることはない？」

「それはあるけど、もちろん、だれもないよ。気のせいに決まってるわけだし」

「気のせいもあるけど、ほんとにいることもある」

背中から頭のうしろにかけて電流が走った。同時に、ひんやりとした風が吹ふいてきた気がした。いや、実際に吹いたのかも。まわりの枝や葉っぱがさがさと音を立てたから。

「ちよ、ちよっと、やめてよ。私はホラー映画とか大好きだけど、それは怖いのが好きなんであって、つまり、怖がりついで……」

「ごめん。ただ、理由を知ってほしいだけ」

「でも、お風呂にいたとして、それは幽霊ゆうれいでしょう？ 天使じゃなくて」

「みんなが幽霊と知っているものが、〈テンシン〉なのよ」

「いや、それは変。天使だったら怖くないはず」

「〈テンシン〉は怖いんだって。だから、水がかかっ**て**びっくりしたんだって」  
なるほど――。

ようするに、ナツミは私とおなじ怖がりなのだ。私は怖い映画が好きだけど、幽霊の存在には否定的。もっともらしく語られる怪談も全部つくりものだと思っ**て**いる。でも、ナツミは幽霊があると信じている。そういうことだ。

そんなナツミはなんだか愛らしい。乙女おとめちつくというか……。

「ナツミは幽霊を見たことがあるの？」

「だから幽霊じゃなくて〈テンシン〉なんだけど……あるよ。というより、うちは代々だいたい〈テンシン〉を祀まつってきた家系なの」

「それじゃこの祠は……？」

ナツミは祠の小さい扉に手をかけた。静かに扉を開け、なにかを取り出した。それを

私の目の前に掲げる。

白い折り紙でつくった着物のように見える。

「ここに〈テンシ〉の魂がこめられてる」

「これが天使なんだね。可愛いじゃない」

「いいえ。これは〈テンシ〉を滅したあとの姿」

「滅した」って……」

「うちの家系はね、この〈テンシ〉を亡きものにする役目を負わされていた。でも、それはわたしのおばあちゃんの世代までで、お母さんやお姉ちゃんは、全然ダメ。逆に〈テンシ〉をもっと積極的に利用しようとしている」

「え？ お姉さんも？」

お姉さんたちはたぶん本気じゃない。異様に怖がるナツミを母と姉がからかっている。そんな光景が目にかさねなかつた。

「マヨ、お姉ちゃんになにかされなかつた？」

「なにかって？」

「たとえば……」ナツミはそう言いながら、私のほうへ手をのばす。そのめざす先は私の……胸！

「な、なに？」思わずあとずさりをする——いや、しようとしたところで、ナツミの手

が止まった。その手はすばやくひっこんだ。

「たとえば、体をさわるとか」

驚きのあまり、心臓が高鳴っていた。

——いや、待って。これはびっくりしたから？ もっと別の理由があるような気もするけど……。

「ねえ？ どう？」ナツミが私の顔を覗きこむ。

ちよつと、待って。急かさないで。考えるから。えつと……そういえば、フユミさんは、私の肩に手を置いた。そして、そのまま二の腕のほうへ指を滑らせて……。

さっきの感覚を思い出して、身震いした。そうだ。なんか変な気分になつたんだ。

ナツミにそのときのフユミさんの様子をありのままに話した。

「で、マヨはどんな気持ちになつた？」

気持ち？ そうあらためて聞かれると恥ずかしい。ほんとうのことはとても言えない。「えつちな気分になつたりしたんじゃない？」

内心を見透かされるようなことを言われて動揺した。しかも、またナツミの口から

「えつち」っていう言葉が……。

「う……うん。嫌な感じはしなかつたよ」自己嫌悪に陥るぐらい顔が火照っていた。それをナツミに悟られないように、顔をそむける。

「それが手なの。お姉ちゃんの」

「へ？」

「(テンシン)を呼びよせる方法はふたつ。ひとつは髪を濡らすこと。もうひとつは性的に興奮すること」

「え？ なに？……お姉さんは天使を私のところに呼ぼうとしたってこと？」

「お姉ちゃんは『(テンシン)は発情した女に誘われる』ってことを知ってるから、なるべくいろいろな人をそういう気分させようとしているの。深く考えているわけじゃない。もう習慣のようになってるだけ」

そんなこととして、お姉さんになんの得があるの？

「つまり、お姉ちゃんは恋をしてほしいと思ってる。そうすることで人は幸せになれる。いろいろな人を目覚めさせることが自分の役目だと考えてる」

「あ……」思わず小さい声を漏らした。

ということとは、いま私がナツミに恋してるのは、お姉さんのせい？

……ん？ あれ？ 私、ナツミに恋してるの？ 自分でそう思ったよね？

——私、ナツミが好き……なの？

どうして？ ついさつき会ったばかりなのに……。

いやいやいや。冷静に。冷静になろう。ナツミに恋してるかどうかは、置いておこう

よ。う……。置いておける？ 本人が目の前にいるのに……。

「あの……ちがうよ。誤解だからね」ナツミがなぜかあわてた口調で言う。

「ちがうって、なにが？」

「いや……あの、(テンシン)はえつちな気持ちになったから来るとは限らなくて、そんな気分じゃなくても現れることもあるし、そのへんのこととはわかっていなくて……」

ナツミがなぜ急に取り乱したのか、しばらくわからなかった。ちよつと考えて「あつ」とひらめいた。

私が水をかけたときにナツミが怖がったのは、天使が寄ってくると思ったから。ナツミの話では、髪を濡らしたり、淫らな気分になったりすると天使が現れる。つまり、あのときナツミはいやらしいことを考えていたってことになってしまふ。

言い訳しなければ私は気づかなかつたのに。まさに墓穴を掘ったところ。そんなナツミがとてつもなく愛おしく思えてきて、ナツミのほうへゆっくり手をのばす。

私の指がナツミの指に触れる。

それまでなにかを一生懸命しゃべりつづけていたナツミが、その瞬間、黙る。ふたりの視線が交差する。

私は微笑む。

ナツミが私の手を握る。

それにこたえるように、私も強く握りかえた。

## 3

私たちは来た道をもどった。

今度はナツミが先を行くことはない。私のすぐ横を歩いている。

幸せを感じていた。ナツミの温もりがつかないだ手から伝わってくるから。

私はナツミを好きになつてゐる。それは認めるしかない。でも、ナツミはどう思つてゐるのだろうか？ 手をつないでくれているから、もちろん私のことを嫌いではないだろうし、ただの旅館のお客さんというつもりでもないと思う。友だち……にはなれたのかな？

「今夜の盆おどりだけど……いつしよにおどつてくれるよね？」少し不安になつてたずねた。ナツミは、ここの風習を快く思つていないみたいだから……。

「うん。いいよ」ナツミが明るい口調で答えたので、胸を撫でおろす。

「誤解しないでね。わたしは盆おどりをやめさせたいと思つてゐるわけじゃないの。その……なんていうか、いろいろな人と同時に付きあうとか……なんか節操がないのが嫌

なだけで」

「え……？ そんなに一晚にいろんな人と……するの？」

「いや、だから、いまはもちろんそんなことはなくて……でも、ほら、モテる人もいるでしょ？ マヨみたいに」

「な、なに言つてるの？ 私なんか全然なんだから……どつちかつていうと、ナツミのほうでしょ？ みんなに好かれるのは？」

第一印象こそ「美人だけど愛嬌がない」とマイナスイメージだったけど、こうして笑顔で話しているのを見ると、ナツミはとても愛くるしい。それだけでなく、気丈さも持っているから、気軽に触れてはいけないような、清純な雰囲気が漂っている。

「まあ、自分でも、他人から嫌われるタイプではないとは思うけど」ナツミが照れくさそうに言う。「だからつて、とつかえひつかえつていうのは……」

「一途つてことだね。それつて、ふつうでしょ？」

「ふつうじゃないから困る。お母さんなんか『もつと恋をしなさい。いろいろな人と愛しあいなさい』つて言うし」

大女将さんも、ずいぶんとあけすけだなあ。まあ、そんな感じの人ではあつたけど。

「お姉ちゃんも『ナツミはもつといろいろな経験をしなさい。そのために〈テンシン〉様がいるんでしょ』つて言つてる」

「ねえ。天使って、愛のキューピッドみたいなものなんじゃないかな。ハートの弓矢を持って、愛を射止めるみたいなの」

「マヨは実際見たことないからそんなことが言えるの！」

あらら。またナツミが妄想モードに入っちゃった。

「ようするに、だよ。ナツミが言いたいのは『浮気はいけない』ってことでしょ？ うん。それは私も賛成」

「そう！ 一度、愛を誓いあつたら、その人と一生添いとげる覚悟をしなくちゃダメ！」  
つないでいたナツミの手に力が入るのがわかった。

昼間から「愛」だの「浮気」だの言ってるなんて、冷静に考えれば、恥ずかしい。だけど、なぜかこの街では違和感がないから不思議。街全体に漂うお祭りの浮ついた雰囲気。気がそう思わせるのかも。

「で、ナツミには、愛を誓いあつた人は……？」

なんの計算もなかった。話の流れから自然に出た言葉だった。でも、言ったあとに、全身から汗が噴き出すのを感じた。

それに反応したはずはないけど、ナツミが私の手を放した。

「あ……いや、それは……ご想像におまかせします」ナツミがうつむき加減に答えた。  
いる。残念だけど、これはいるな。ナツミには、相手か。こういうとき、いないなら

「いない。」って言うはず。こんなふうな答えをはぐらかすのは、恋人がいる証拠。

「そういうマヨは……？」ナツミが真顔で聞きかえす。

いるわけじゃない。もしそうだったら、もつと幸せな人生を送ってる。自分でも外見はそれほど悪くないと思う。お世辞もあるだろうけど、容姿を褒められることもあるし。だけど、見た目と、幸福度は比例しない。その真実をこの歳になって悟りはじめていたところ。

「私はフリー。恋人募集中。いや、応募中。相手はナツミ」

「え？」

冗談で言ったつもりなのに——いや本心だけど、それを口に出したという行為そのものはおふぎけなのに——ナツミは深刻そうに私を見かえした。

「うそ、うそ。忘れて、忘れて」

その言葉が喉まで出かかったけど、結局言わなかった。茶化してしまうのは、ナツミに悪いと思ったから。それに、否定したら可能性がほんとうになくなってしまふと思っただから。

「マヨ……」ナツミが私から視線をはずし、前を向きながら話しはじめた。「あのね、お姉ちゃんがマヨの体にさわって、その気にさせたのは、可能性があるからだよ。いろんな人がマヨのことを好きになると思ってたから、えっちな気持ちを引き出そうとしたの。お

姉ちゃんとはあまりうまくいってないけど、他人を見る目はたしかだよ。こう言ったらアレだけど、マヨがまったくモテなそうなの、訝えない女の人だったら、お姉ちゃんはなにもしなかったはず。わたしも初めて見たときに思ったもの。『あ、この人は愛にあふれている人。そして、その愛を他人に分けてあげられる人だ』って」

なに言ってるの、ナツミ？ 褒めてくれてるんだらうけど、ずいぶんとまわりくどいじゃない？ ……いや、たぶんナツミは純粋な気持ちで話している。だから、その言葉は素直に受けとるべきなのだ。

「ありがとう……」 ナツミの手をとり、両手で握りしめた。この上ない感謝の意をこめて。

「愛する人は必要だけど、たったひとりいればいい。たくさんの人から愛されなくても」 「だけど、ここではそうはいかないかも。もし、〈テンシ〉が現れたら……」

ナツミはとても真面目な顔だと思ふ。私をからおうとしてくれるわけではない。それはよくわかる。でも、少し常軌を逸している気がする。

「盆おどりは、性的な興奮を得るための手段。愛が欲しい。そんな気持ちになった人のところに〈テンシ〉は現れる」

「ナツミの家の人は、その天使様をどうするの？ さっき『亡きものにする』とかって……」

「いや……」 そう言ってナツミは下を向く。

「うちの旅館に盛り塩があったのに気づいた？」 しばらく黙ったあと、そう切り出した。「うん……」

「あれは、〈テンシ〉が現れたときに退治するために使うの。だから、館のあちこちに置いてるんだけど……お母さんとお姉ちゃんは、逆に〈テンシ〉に来てほしいと思ってるぐらいだから、盛り塩をしようと思わない。おばあちゃんから言われたはずなのにね。わたしのやることを止めはしないけど……」

「なんで退治するの？ だって天使って歓迎すべきでしょ？」

「〈テンシ〉が連れていくのは、この世でない世界。つまり、死の世界ってこと」 天使に出会ったら死ぬ……ってこと？

「ねえ、なんか怖いよ……もう、やめよ、この話。ナツミさえよければ……」 「うん、わかった……」

私が怖いのは天使ではなくナツミ。このままでいいのかな……。なんとかその信念を変えさせたほうがいいのではないか。ナツミの“信仰”はナツミ自身に不幸をもたらす。そんな予感がある。

街までおりると、私たちは、浴衣ゆかたをレンタルしてくれる呉服屋さんへと足をのびした。盆おどりの浴衣なんて古めかしいイメージを抱いだいていたけど、なかなかおしゃれなデザインのものがそろっていた。最近さいきんは、観光客を呼びよせるために、有名なデザイナーが手がけた浴衣も用意よういされているらしい。

私はお気に入りを決め、着替えた。

「あ……綺麗……」私の浴衣姿を見たナツミが潤うるんだような目で見つめる。「やっぱマヨが着るとなんでも似合っちゃうんだなあ」

それは旅館のお客さんに対する社交辞令しゃうじりれい？

それとも友だちとしての本心？ 私以後

者だと信じたい。信じさせて。

「よし。次は下駄げだだね」そう言いながら、ナツミは私の手をひっぱっていく。

下駄屋さんでは、素材や形、サイズなどが自分の好みで選べた。鼻緒はなおもその場で取りつけてくれる。

こうしていつでも盆おどりに参加できる用意ができた。

ちよつと長身の私よりも、ナツミのほうが浴衣は似合うと思う。

——早く見たいな。ナツミの浴衣姿……。



〈郡上八幡旧庁舎記念館〉にたどりつく。ここで、〈郡上おどり教室〉が開かれている。ナツミは旅館に用事があるとかで、いったん帰ることになった。姿が見えなくなると、急に心細さが襲おそってきた。

会場に入ると、20〜30人ぐらいの人がいた。参加者は、家族連れや恋人同士、まさに老若男女らうじやくなんにょ。ひとりで来ているのは私だけかもしれない……。

おどりの講習会が始まった。郡上おどり保存会のおばさんが実演する。それを見ながら、手足を動かしていく。最初はきちんとおどるのは大変なんだけど、見よう見まねでやっているうちに、楽しい気分になってくる。まわりの人も笑顔になっている。さつき感じた心細さが嘘うそみたい。

40分ほどの講習をおえ、〈旧庁舎記念館〉をあとにした。



盆おどりの本番が始まるのは夜だし、旅館に帰るのにもまだ早い。浴衣姿のまま少し歩くことにした。



〈旧庁舎記念館〉のすぐ北に〈新橋〉がかかっている。それほど大きな橋ではないけど、人々の往来が激しく、車も頻繁にとおつていく。

道を歩く人たちは浴衣姿の割合が高くなってきた。仲よきそうに歩く人たちにどうしても注目してしまう。

——浴衣姿のナツミといっしょにあんなふう歩いてみたい……。

橋の真んなかあたりでそう思いながら川のほうへ目をやると、不思議な光景が広がっていた。

川岸に灯が並んでいる。電灯ではない。オレンジ色の小さな光が、ゆらゆらと揺れている。そんな無数の光が遠くのほうまで連なっている。その灯に視線が吸いこまれた。これも祭を盛りあげる演出のひとつなのだろう。

空の色が変わり、山の緑も深くなってきた。川の流れも、昼間見たのとはちがっている気がする。人だけでなく自然までもが夜を迎える準備をしているようだ。夜になるにつれ静けさを増していくのではなく、反対に活気づいているように思える。あたりが暗くなることでかえって街全体の息吹が強調される。

だからこそよけいに、私のやせ細った心がかき消されそうになる。

好き好んでひとりでいるわけじゃない。いつの間にか、孤独になっただけ。そして、自分で自分のみじめさに気づかないように——いや、気づかないふりをするために、

平気を装う。ほんとうは私だって、さびしいんだ。でも、それを紛らす方法がわからない。……いや、方法は知っている。横にだれかがいてくれるだけでいい。でも、その夢がなかなか叶わない……。

「なにしてんの？」背後から声がして、我に返る。「遅いじゃない」  
振りむくと、ナツミが立っていた。

薄い黄色を基調とした浴衣。下駄の赤い鼻緒が絶妙なアクセントになっている。手には小さい団扇を持ち、ヒラヒラと動かしている。風を送っているのではなく、形式的にあおいでいるようなしぐさだ。

「ナツミ……」  
あまりの可愛らしさに、駆けよって、抱きしめたい衝動にかられた。でも、私にはその資格がない。

「あれ？ その顔……おどり教室、つまらなかつた？」

「え？ いや、そんなことないよ。楽しかったよ。ただ……」

ちよつとさびしかつただけ。そう言おうとして、言葉を飲みこんだ。

「疲れちゃって……」

「だつたら少し早いけど、ご飯食べようよ。もう用意できてるよ」

ナツミの表情は明るかつた。黄色い浴衣だから、よけいにそう思えた。ナツミ自身も

浴衣に着替えたことで、昼間とはちがう気分になっているのかもしれない。「ほら」ナツミが私の手を握る。手をつなぐのは、自然なことになっていた。ナツミの手の温もりが私の凍った心を溶かしていくみたい。ゆつくりと、少しずつ、確実に……。

○

部屋にもどると、窓のほうへ近づいた。川岸に並んだオレンジの灯がここからも見える。あたりはさらに暗さを増し、灯の美しさが際立った。

「おまちどおさま」ノックの音がしたかと思うと、料理をのせたお盆を持って、ナツミが部屋に入ってきた。浴衣の上にエプロンをしている。この和風の旅館に似つかわしい格好だ。

ナツミは慣れた手つきで料理を並べていく。

「わお！」鮎の塩焼き、飛騨牛の焼き肉、お刺身、うどんの小鉢、魚のフライ、茶わん蒸し、おみそ汁、おひたし……。さまざまな料理が所狭しと並べられた。

「鮎はね、今日捕れたばかりだから、美味しいよ」手際よく配膳をおえたナツミが言う。ナツミといっしょに食べたなら、どれほど美味だろう。でも、ナツミは「じゃあ、あとでね」と言いのこすと、そそくさと部屋を出てしまった。まだ仕事が残っている

だろうし、ふたりで食事なんて、無理だよね……。

「いただきます……」さっそく鮎の塩焼きから箸をつける。まだ焼きたてで、口のなかをやけどしそうになる。でも、香ばしさと自身のやわらかさが、なんともいえない風味を醸し出している。無意識のうちに箸がどんどん進む。夢中になって口に運んだ。そういえば、お昼におだんごしか食べてないんだっけ。自覚はしていなかったけど、体は空腹を感じていたのかも。だから、よけいに料理が美味しい。

「ふう……ごちそうさま」自分でも驚くぐらいの早さで、たいらげてしまった。和食だから、太ることはないと思うけど。それに、これからおどるんだから、体力をつけないとね。

○

夕食をおえ、満足感に浸りながらメイクを直したりしていると、フユミさんがやってきた。郡上おどりに行くなら、ほかの宿泊客といっしょに、会場まで車で連れていってくれるという。私は、夜の街を歩きたいからと、その申し出を断った。

観光雑誌には書いてなかったけど、郡上八幡は夜のほうが面白そう。

部屋を出て玄関に向かう。館内は静まりかえっていた。昼間も騒がしかったわけでは

ないけど、なんとなくほかのお客さんの気配はあった。それがいまはない。みんな会場に行ったのだろう。

受付にただひとり大女将さんがいた。「いつてらっしゃい」と声をかけられる。

「あの……ナツミさんは……？」

「みんなといっしょに車に乗っていったと思うけど……」

そうだね。私にばかりかまってもらえないよね。ナツミはお仕事なんだし……。

○

すっかり夜が更けていた。人気も少なくなっている。

吉田川までやってきたので、川のほうへおどっていった。真つ暗闇ではないけど、慣れない下駄を履いているから、足もとがおぼつかない。転びそうになりながらも、遊歩道にたどりつく。オレンジ色のカンテラの灯が、さつきより間近に迫る。

橋の上はおどりの会場へ向かう人が多く歩いていただけ、この遊歩道には人影がなかった。自分ひとりだけの世界に入りこんだみたい。私は川下に向かって歩きだす。

カランカランと下駄が鳴る。私と、うしろを歩く人の音が重なった。

「マヨ」名前を呼ばれ、振りかえった。

——ナツミ!?

「あれ……みんなと会場に行ったんじゃない……」

「またお姉ちゃんとかんかしそうになって車をおりちやった。マヨの浴衣が見えたから、追いかけてきた」

なるほど。ナツミをよく見ると、息があがっているようだった。そう。私を追いかけてくれたんだ……。

「ねえ。私といっしょに、ここを歩いてくれない？」意を決して、自分の願望を口にしてみた。

「うん。まだ時間あるし」ナツミは快くOKしてくれた。

自分ひとりだけだったはずなのに、そこは私とナツミのふたりの世界になった。実際、このとき遊歩道を歩いていたのは、私たちだけだったと思う。

カンテラは3メートルぐらいの間隔で置かれている。炎は空気の流れに沿ってなびく。照りかえす光で浮かぶナツミの姿も幻想的に揺れていた。

「綺麗……」ナツミがひとりごとのようにつぶやいた。

「そうだね。東京にもイルミネーションはあるけど、これはそういうのとはまたちがうね」

「いや、わたしが言ってるのは、マヨのことなんだけど」

「ちょっと、やめてよね」

悪い気はしなかった、ナツミに褒められるのは。「ナツミだって綺麗だよ」って言いたかったけど、そんなひとことがいまの私にはとても重く感じられた。だから、口に出すことができなかった。

「マヨは大学3年生だよね。もう、進路は決まってるの?」

「うん。高校の教師」

「わああ。学校の先生かあ。いいなあ。うん。なんかわかる気がする。マヨって、貫禄あるもの。頼れるお姉さんって感じ」

「ナツミは……?」

途端にナツミの表情が曇った。

「秋から東京の会社に……」

「いいじゃない。なんでそんな顔してるの?」

「わたしには……」そこまで言って、ナツミは口をつぐんだ。

「言いたくなければ、無理には聞かない。ごめんね」

「わたしには、〈テンシ〉を倒すという使命がある。だから、会社はやめようと思う」

え? 私は驚きを隠せなかった。なんてこと……。ナツミの抱く信念が不幸を招くような予感がしたけど、すでに現実になりかけている……。

「びっくりしたでしょ? わたしのこと変だと思ってるでしょ? わかるよ。マヨの考えていること」

「変というか……」二の句が継げなかった。

「非常識なのは自分でもわかっている。だから、このことはだれにも話してない。お姉ちゃんたちには適当に言い訳して誤魔化すつもり……」

「ナツミにとって、天使を退治することが、それだけ大事なことだよね……」

「〈テンシ〉は、この街だけじゃない。日本中にいる。ひょっとしたら外国にも」

「外国……?」

宗教? ナツミは新興宗教かなにかにはまっているのでは? そう思うと、とてつもない不安感が襲ってきた。

「いま、わたしが変な宗教に入信しているんじゃないかって思ったでしょ?」

「い、いや……」ナツミにはすべてを見透かされているようで、ますます不安感が募った。

「たしかに宗教といえは宗教かもしれない。でも、〈テンシ〉の存在は真実だし、実際わたしは何人も救ってきた」

私になにかできることはある? なんとかしなくちゃ。ナツミをたすけなくちゃ。そんな強い願いがわきあがってきた。

「天使退治って、具体的にはどうするの？」  
「(テンシ) はやつぱり人が多いところに現れる。それだけ、恋をする人が多いわけだから。(テンシ) が出現する情報を集めて、そこを襲撃するの」  
「情報は、どうやって集めるの？」  
「おばあちゃんのおときは、口コミに頼るしかなかったみたいだけど、いまはネットがあるじゃない？」

「あの……私が手伝えることってある？」

「え……？」 ナツミは黙りこんだ。私の申し出を予想していなかったのだろう。

「マヨを巻きこむわけにはいかないよ。命をおとすかもしれない」

いくらなんでもそれはないんじゃない？ ナツミがそう思いこんでいるだけ。

ナツミが真剣な表情で語るたびに、切なくなってくる。もつと、ふつうの人生を送ってほしい。よけいなお世話かもしれないけど、そんな想いで頭がいっぱいになり、哀しみに襲われた。

ふたりの間にしばらく沈黙の時間が流れる。

対岸のほうへ目をやると、そこにも灯が並んでいた。カンテラだけでなく、川沿いに建つ家々の窓から漏れる光もある。紺色の空とおなじ色に染まった川。そこに光が揺れながら映っている。

その光はとてはかなげだった。夜にしか灯されない光。数時間しか輝いていない光。まるで私とナツミの関係を象徴しているみたい……。

ふと、視界にナツミの姿が入ってきた。ゆっくりと近づいてくる。両手を私のほうへのばし、そして私の肩を包みこんだ。ふたりの体が密着する。ナツミの髪から立ちのぼる香が私の思考を麻痺させた。

「ありがとう……」 耳元でつぶやくようにナツミが言う。

「わたしのこと、心配してくれてるんだね。やつぱりマヨってすごい人。すごく優しい人。ふつうだったら、わたしの話を聞いたら、逃げ出しちゃうのに……」

私もナツミの肩を抱きたかった。体を包んであげたかった。だけど、できなかつた。体が固まって、動けなかつた。心のどこかでナツミを拒んでいるの？ 奇妙な信念を持つている人だから？ いや、ちがう。私は受けいれている。だからこそ、放っておけないと思つたのだ。だけど、ナツミを救う方法がわからない。それがいまはとても哀しい。

「大丈夫だよ、マヨ。わたしは自分の考えが、他人から見ればとても変だつてことは十分にわかっている。それに、だれかに迷惑をかけたり、傷つけたりは絶対にしない。それだけは守るから。心配しないで」

「それはわかっている……わかつてるんだけど」私の目に涙がたまっているのに気づいた。

「さ。行こ。これから楽しい（郡上おどり）が始まるんだから」ナツミが私から離れる。私たちは手をつなぎ、会場をめざして歩きはじめた。

## 4

郡上おどりの会場は（城下町プラザ）。そこへ向かう人々で道はあふれていた。浴衣を着ている人も多いけど、Tシャツにジーパン姿の人もいる。おどりには、そんな格好でも参加できるのだ。

道のあちこちに、祭を盛りあげるためのギミックがほどこされている。

たとえば、頭上にある大きな提灯。直径は2メートルほど。「郡上踊」と大書さされている。昼間にも目にしたけど、夜は淡い光を放ち、幻想的な空間を彩るのに一役買っている。

はやる気持ちがおさえきれなくて、足どりが軽くなる。でも、慣れない下駄を履いているので、なんだかもどかしい。ナツミは履きなれているはずだけど、歩幅を私に合わせるようにみている。

（城下町プラザ）には人だけできていた。まだおどりは始まっていない。かき氷ややきそばなど、祭には欠かせない出店が並ぶ。

会場の中央に太鼓がのつた屋形が見えた。トラックの荷台ぐらいの大きさで、屋根がついている。そこで三味線や笛を持った人が準備を進めている。あそこがおどりの中心となるわけだ。

会場の背後には山があり、頂に郡上八幡城が見える。影絵のような山のシルエツトに、ライトアップされたお城が浮かぶ。城下町ならではの光景だ。

「ねえ、なんか食べる？ 買ってきてあげる」

「いや、いまはいいよ」夕食を食べたばかりで満腹だったし、これからおどると思うとなんだか緊張して食欲がわかない。

「じゃあ、輪のなかに入ろう」ナツミはそう言って、中心へ進んでいく。私もそれを追う。

ざわめいていた会場の空気が少し変わった。

「始まるね」私がそう言うと、ナツミは微笑みで返した。

郡上おどりは、1曲をおどりつづけるのではない。「かわさき」「春駒」「三百」「やつちく」「げんげんばらばら」「猫の子」「わき」「郡上甚句」「古調かわさき」「松阪」という10曲が演奏される。

おどりが始まった。「かわさき」。毎回1曲目はこの曲と決まっているそうだ。

昼間練習したはずなのに、すでにうる覚えで、出遅れてしまった。ナツミのステップ

を見ながら、なんとか形にする。  
 はたから見れば不格好だったかもしれないけど、だれかが私に注目しているわけでもないし、べつに気にならなかった。

「あ、うまいじゃない。ちゃんと練習したんだ」ナツミがおどりながら笑う。  
 ナツミはさすが地元の人、旅館の娘だけあって、様になっっている。

——かつこいいな、ナツミ。

まだ「かわさき」が奏でられているのか、それとも別の曲に移っているのかは、よくわからなかった。笛や太鼓や三味線で演奏されているから、音色は純和風なのに、リズムやメロディーはポップスを聴いているみたいだった。

音楽に合わせて体を動かすのが、これほど楽しかったとは。大げさに言えば、カルチャーショック。

ここまでくると、昼間マスターしたはずの振りつけは完全に消しとんでいて、ナツミやまわりの人を見ながら、むりやりそれに合わせているという感じ。でも、ここにいる人がみんな慣れているわけではないから、私だけが特別目立っていることはないはず。

「大丈夫？ 疲れてない？」

「うん。平気」ナツミの気遣いが嬉しい。

始まってからどのくらい時間が経ったかわからなくなってきた。もはや体が勝手に動

いている。体中から汗が噴き出しているけど、それがむしろ心地いい。頭が考えるのをやめてしまっているみたい。いつまでも音楽に、そしてこの人の輪のなかに身を委ねていたい……。

やっぱり私はさびしかったんだと思う。それをずっと誤魔化していたんだ。自分自身を——。

頬に冷たい感触があった。

水滴がおちてきたような……。

もう一度、頬に水がかかる。

手にも同じ感覚を覚えた。

「雨だ」だれかの声が聞こえた。

演奏はつづいている。でも、みんなのおどりの動きが少し鈍った。

「雨」「降ってきたね」そんな声があちこちであがる。

「ナツミ、雨……」そう言おうとして、ナツミがそばにいないことに気づく。

——どこに行ったの？

異様な孤独感が急激に心を支配する。なぜそこまで強烈な感情がわいてくるのか自分でも不思議だった。

雨足は急に強まった。演奏が途切れた。スピーカーからアナウンスが聞こえる。いつ





私のまわりには、もちろんだれもない。でも、自分の耳のそばでだれかが笑った。近くの家から聞こえたのかもしれない。

ふふふふふふ。

まただ。

きやあああああああああああああああ。

唐突に甲高い声が響きわたった。驚いて思わず歩みを止める。まわりを見わたしても、なにも変わるところはない。

ふふふふふふ。きやあああああああああああああ。

笑い声と悲鳴のような声が不協和音を奏でている。何人もの女の声が重なりあつていようだ。

音は、ヘッドホンで音楽を聴いているときみたいに、頭のなかで鳴っている気がした。どっちにしても、ここには長くいたくない。

私は駆けだした。

不協和音は、ときどきおさまったり、小さくなったりしている。頭のなかで音がして、いるように聞こえるのは変わらず、声が私を追いかけているように思えた。

だれかに肩をたたかれた。

——え？ そんなばかな。私は走っているのに、どうやって……。

たしかめるため、立ちどまって、振りかえる。

だれもない。

うしろを向いた私の背中にだれかがぶつかった。

たしかにぶつかった感触はあったのに、背後に人がいる気配はない。

私は震えていた。濡れた体が冷えたせいかもしれない。でも、恐怖感もあったと思う。人間ではないなにかが私のまわりにいる。

錯覚かもしれない。でも、感覚的には確実に何者かに私は追われている。

ゆっくりと首を動かして、うしろのほうを見ようとしたり。

白い影が視界の端に入った。

正体をたしかめようと、影が見えたほうに視点をずらした。

民家の壁があるだけで、とくに異常はない。

そのとき——。

民家と民家の間に白い影が現れたり隠れたりしているのが見えた。

白い布きれがふわふわ舞っているように思える。

布きれはひとつではなかった。

遠くのほうにも2〜3枚の布が動いている。

いや5〜6枚……ん？ もっと？

きやああああああああ。  
女の悲鳴が頭に響く。

布きれは浴衣のように見えた。

風もないのにゆらゆら揺れている。これも祭の余興なの？

いや、浴衣じゃない。

人だ。

人が風になびいている。

え？

おかしい。そんなことあるはずが――。

きやああああああああ。

悲鳴はあの人たちが発している――としか考えられなくなっていた。

いくつかの白い人影が私に近づいてきている。

道をまともに進んでくるものではなく、民家の壁や屋根を伝ってきていた。

どう見ても、人間のできる芸当ではない。

〈羽は生えてない。白い服は着てるけど……〉

ナツミの言葉が頭に浮かぶ。

もしかして、これが天使？

私の二の腕がだれかにつかまれた。

――遅かった！ もっと早く逃げればよかった……。

ふふふふふふ。

私の耳元で笑い声をする。

うしろからだれかが私の肩を抱きしめている。

腕が胸のほうへまわる。その腕は見えない。

私は決意を固め、走りだした。腕や肩にあつた感触はいつの間にか消えていた。

人影のほうへ突っこむことになる。でも走りぬければなんとかなると、理由もなく確

信していた。

ふふふふふ。きやああああああああ。

白い人影が発する声があたりに響く。

腕や足、背中に感触がある。たくさんの人が私のほうへ手をのばし、それがあたって

いる感じ。私をつかまえようとしている。でも走っているからうまくいかない。そんな

状況を想像した。実際には手なんか見えないけど……。

角を見つけたらとにかく曲がる。これであの人影をまけるはず。

道がだんだん細くなっていく。

息があがり、苦しくなってきたので、走るのをやめた。立ちどまらずに、早足で歩い

た。

水が激しく流れる音が聞こえる。街のあちこちにある溝に雨が流れこんでいるのだ。むこうのほうで車が横切った。あそこが大通りだ。あそこまで行けば……。

——つかまってたまるか！

ふたたび走りだそうとすると、腕を力強くつかまれた。

——しまった！

「マヨ！」

背後から声が出た。なぜ私の名前を？

「ちよつと、マヨ！ なにしてるの！」

うしろを見た。

ナツミが傘を差し、もう片方の手で私の腕をつかんで立っている。民家の窓から漏れたほのかな光がナツミの険しい顔を照らしている。

「傘をとりについてる間にいなくなっちゃって……どこ行つてたの？」

それはこつちのセリフ！

「こんなに濡れちゃって」ナツミが私を傘のなかに入れてながら、タオルを差し出した。私はそれを受けとり、頭や顔を拭く。タオルのやわらかい感触がそのままナツミの優しい

さを象徴しているみたい。私は少し涙ぐんでいた。それもあわててタオルで拭きとる。

「白い影が……」安心感のためか、私の声はかすれていた。

「見ちゃったんだね……この街の秘密……」ナツミの顔は厳しいままだった。

「私、死んでたの？ あいつらにつかまったら……」

「〈テンシン〉に襲われたら、まず意識を失ってしまう。そのまま亡くなってしまう人もいるし、たずかる人もいる」

「死ぬわけじゃない……？」

「でも、マヨが無事でよかった。あんな恐ろしい姿を見たら、ふつう足がすくんじやうもの」

恐ろしい？ 姿そのものには恐怖は感じなかった。むしろ未知の存在、理屈で説明のつかない相手に対する不安感のほうが大きい。

「さ。宿にもどろ？ お風呂に入って体を温めないと風邪ひいちゃうよ」

私の右腕にナツミの左肩が密着した。その腕をそのままナツミの右肩へまわす。強すぎず弱すぎない力で肩を抱く。

ナツミが私にもたれかかったような気がした。

視界があいまいになるほど湯気の立ちのぼる大浴場に足を踏み入れる。玄関や廊下とおなじように、煌々と灯が灯っていることはなく、薄暗い。床はタイルだけど、湯船は岩でこしらえてあり、天然の温泉をイメージさせた。

シャワーのコックをひねり、頭からお湯を浴びる。自宅のシャワーとくらべてちよつと温めだけど、かえてそれが気持ちいい。

へお風呂で髪を洗っているとき、だれかの視線を感じることはない？

タイムリングの悪いときに、よけいなことを思い出しちゃったな。するじゃん。だれかに見られている感じが……。

カタ。

いま、音がした？ たぶん脱衣場のほう。

シャワーの湯を頭から浴びたまま、顔を音のしたほうへ向けた。

脱衣場とお風呂場は磨りガラスで仕切られている。

そのガラス戸の向こう側に白い影が立っていた。

——天使!? ここまで追いかけてきた？

ガラガラ。

ガラス戸が開き、人影が入ってきた。

ほかのお客さんではない。裸ではないみたいだから。

——どうしよう？

さっきの恐怖感がにわかに甦る。

温かいお湯を体に浴びながら、鳥肌が立っていた。

「お客さん、お背中流しますよ」明るい女の声が出た。

——え……？

近づいてくるのは、ナツミだった。

白い影に見えたのは、白いTシャツに黄色いショートパンツを穿いているからだだった。すらりとのびたナツミの脚の白さに目が釘づけになる。

「……背中を流すサービスなんてやってるの？」平静を装いながらたずねた。

「うん。ほんとは前もって聞いておくんだけど、マヨだったらいいかなって……嫌？」

「嫌なんてそんな……」

背中をナツミに向ける。

「わあ……すごい綺麗」

「え？」

「マヨの肌。すごいスベスベ。なにこれ？ お手入れとかしてんの？」  
 「とくになにもしてないけど……」

どんなささいなことでも、ナツミに褒められると、強烈に心に響いた。  
 背中に妙な感触があつて、体がびくつと反応する。

「なに？ なにしてるの？」

「あ、ごめん。思わずさわっちゃった」ナツミの指が背中を撫でたのだとわかった。その指はすぐにひっこめたみたいだ。

いや。いいんだけど。さわっても。というより、もつとしてほしいかも……。

ふいに別の感触が私を襲う。

「あ……」思わず声が漏れる。

「ごめん、痛かった？ まだ慣れてなくて」

いや、いままで味わったことのない感覚に驚いただけ。

ナツミのタオルが私の肌の上を滑るように動いていく。

「あふ……」なんでこんな声が出るのか、自分でも不思議だった。

「ちよつと！ 恥ずかしいから変な声出さないでよね」ナツミの言葉に少し笑いが含まれていた。

——恥ずかしいと言わないで。というより、ナツミ、わざとやってない？

耐えきれずに自分の胸を両手で隠した。ナツミからは胸は見えないけど、自分だけが裸でいることに妙な違和感を覚えた。

——ここでは、えっちな気分になっちゃいけないんじゃないかなかった？

「ねえ、天使に襲われても、死なない人もいるって言ったよね？」自分の気持ちを变えたくて、むりやり話を振った。

「うん……」

「死ぬ人と死なない人、どんなちがいがあるんだろう？」

「おばあちゃんの話では、たすかった人は、あの世で元の世界にもどりたいと思っただって」

「あの世ってどんなとこなのかな？」

「自分の想っている人と一生愛しあいつづけることができるって言ってた」

「なんか私のイメージしている死後の世界とちがうな」

「だからもどりたいって思う人のほうが少ないらしいの」

「でも、ナツミはやめさせたい。天使の活動を」

「うん……」

ナツミの声が暗くなってしまった。この話題を出したのは失敗だった。

「はい、おしまい」ナツミが私の背中にお湯をかけ、泡を洗いながす。

「ほかのところは……洗ってくれないの？」  
 「え……？」軽い冗談のつもりだったのに、ナツミは絶句した。  
 「やだ。やめてよね」そう言いながら、そそくさと脱衣場のほうへもどって行ってしまった。  
 ナツミを怒らせちゃったかと一瞬不安になった。でも、最後にちらりと見せた横顔は笑っていた。

○

部屋にもどると、すでに布団が敷かれていた。おそらくナツミの用意してくれたものだろう。  
 布団の上に勢いよく寝転がり、手足をのばした。日本間独特の木目の天井が目に入った。

激しく雨の降る音が聞こえてくる。

体を横たえると、一気に疲労感が襲ってきた。同時に、これまでの出来事が甦ってくる。

郡上八幡のあちこちを流れる水の風景と音。深紅の欄干の橋に立っていたナツミ。郡

上おどりのあと出現した天使——。

すべて今日一日で見聞きしたものののだ。

友だちに絶好の土産話ができた。ちよつと脚色したりして話す面白いかも。そう思うと、心のなかに陽が差してきたような気持ちになった。

——でも、ナツミのことは話すべき？

……そもそも「ナツミのこと」ってなに？ 旅館に美人姉妹がいたこと？ 妹さんに観光案内してもらったこと？ そのコは天使と呼ばれるバケモノと戦うことに人生を賭けようとしていること？

それとも私がナツミを好きになっちゃったこと……？ それをすでにおわってしまったこととして話すの？

明日の朝、旅館をあとにするとき、ナツミともさよならをしなければならぬ。あたりまえだ。私は旅館の泊まり客、ナツミは仲居さんなのだから。

でも、それでいいの？ 私はそれで納得できる？ すっきりとした気分が東京へ帰れるの……？

○

いつの間にか、寝入ってしまったらしい。記憶にはまったくないけど、部屋の電灯を消し、布団のなかに入っていた。

雨の音はあいかわらずつづいてる。

ぼた。

顔に水滴がおちた感触があった。

ぼた。

畳の上にも水滴はおちた——そんな音がした。

——雨漏り？

この旅館はたしか2階建てで、この部屋は1階。そもそもお客の泊まる部屋が雨漏りするなんて、考えられるかな……？

真実をたしかめようと目を開けた。部屋は真つ暗でなにも見えない。かろうじて、天井の中央にある電灯の形だけがうつすらと見てとれる。

数秒のち、目が闇に慣れたせいなのか、白いなかかが天井にあるのがわかった。布のようなものが貼りつけてある。

——あれ……あんなの天井にあったっけ？

突然、白い布が動いた。

天井を移動し、壁際に迫った。

——え？ まさか!?

ここで、ようやくあの白い影のことを思い出し、一気に目が覚めた。

布団から飛び出し、白い布とは反対側の壁際まで退避した。

そこまでは無意識のうちに体が動いた。壁まで来た途端に全身の力が抜けた。恐怖感が一気に襲ってきて、行動する気力をこっそり奪っていった。

自分のなかにわずかに残っていた勇気を使って、勢いよく立ちあがり、電灯を点けようと手をのばした。

電灯のヒモは見えない。手がなにもない空間を動きまわる。

ヒモが手にあたる感触があったので、しっかりと握りこむと、力強くひっぱった。

一瞬の間のあと、部屋の中が光で満たされる。

それと同時に、白い影は姿を消して——ない。

いる。

まだ。

壁のところに。

それは布ではなかった。肉体を持っていた。しっかりと存在感のある肉体を白い布が包んでいるのだった。

よく見ると、それは白髪の人間だった。

四つん這いの格好で壁に張りつき、ヤモリのように床のほうへゆつくりと動いている。白くて長い髪が垂れさがり、顔を覆いかくしていた。

どん。

なにかが床におちた。

おちたのは、私自身で、布団の上で尻餅をついていた。

白い人の両手が床にとどいた。そのまま両膝を床に置く。

私は這いずるようにして、壁際へ移動した。

白い人が顔をあげて、私を見た。

老婆だつた。

醜い皺が顔に刻みこまれている。

その目は赤く光っていた。

いずれにしても、人間ではない。

私の手になにかがあたつた。たぶん枕だと思ふ。

一縷の望みに賭けた。この枕を投げつければ、あの人は消える。なぜならこれは幻覚だから。脳がそう認識すれば、目の前の光景は現実のもの——白い人など存在しない——になるはず。

白い老婆の顔を的にして、枕を投げた。

枕が白い人を素通りするのを脳が知覚し、幻覚はすうっと消え——ない。消えなかつた。

枕は老婆の顔にぶつかり、そのまま下におちた。

これは幻覚じゃない。

しゃがんだ姿勢のままうしろにさがる。

私の背中が壁につく。

もうこれ以上さがれない。

老婆が大きく口を開けた。

口のなかに牙のようなものが見えた。

きやあああああああああ。

あの不快な声が木霊した。

たすけて。

部屋まで来ちゃつた。

たすけて。

早くどっかへ行つて。

たすけて。

私を襲つてもなんの得にもならないよ。



たすけて。  
まだまだやりたいことはあるんだから。  
たすけて。  
あなたはだれ？  
たすけて。  
なんのために私を追いかけてきたの？  
たすけて。  
なんにも悪いことしてないのに。  
たすけて。  
これはなにかの罰？ 報いなの？  
たすけて。  
死にたくない。  
たすけて。  
たすけて。  
たすけて。  
どん。  
左後方で衝撃音がした。

勢いよくだれかが部屋に入ってきた。

なにかを老婆にたたきつけた。白い粉か液体があたりに飛び散る。

きゃああああああああああ。

鋭い悲鳴が部屋中に響きわたる。

老婆が突然立ちあがり、窓のほうへ突進した。

窓は開いていなかったのに、老婆の姿は消えた。

部屋の中央に立つ人物を凝視した。

窓のほうを向いているので顔は見えない。

その人がその場にしゃがみこんだ。力が一気に抜けたようだった。

肩で呼吸をしている。息があがっているようだ。

「なんで〈塩〉を使わないの？ なんで枕なんか投げてるの？」

息も絶え絶えに、つぶやくように言った。その声でナツミだとわかった。

「しっかりしてよね……」 ナツミが私のほうを見る。疲労が表情に浮かんでいたけど、口元は笑っているように見えた。

「ナツミ！」思わずナツミに抱きつく。体を両腕でしっかりと抱きしめる。ナツミの存在がとて頼もしく思えた。安心感が私のなかに広がった。

「怖かった……ダメかと思った……」私は泣きべそをかいていた。

突然、ナツミの体が小刻みに震えだした。驚いて、ナツミから体を離す。

「わたしだって、怖かったんだから」ナツミも涙声になっていた。

「だって、何人も救ってきたって……？」

「(テンシン)と戦ったのは今日が2回目。前のときはおばあちゃんもいたし」そう言いながら、今度はナツミのほうが体を預けてきた。ふたたびナツミの体を包みこむように両腕を背中にまわす。

私たちはなにも言わないまま、しばらくその状態でいた。ときどき私やナツミが鼻をすする音だけが部屋に響いた。

「ねえ……」やがて私のほうから口を開いた。「このままじゃ怖くて眠れない。いつしよにこの部屋で寝て？」逡巡するより先に、言葉が出ていた。

「うん……」ナツミは消えるような声で答えた。

○

ナツミは押し入れにであったもう一組の布団を取り出し、私の布団の横に敷いた。私もその作業を少し手伝ったけれど、ふたりの間に会話はなかった。

「じゃあ、おやすみなさい」ナツミはそっけなく言うと、そそくさと布団に潜りこんで

しまった。

「おやすみ……」私は部屋の電灯を消し、布団に入った。

鼓動がまだ激しく脈打っていた。興奮はおさまっていなかった。

ナツミのほうに目をやる。暗い部屋のなかで、目をつむっているのか、開けているのかわからない。顔はまっすぐ天井のほうを向いていた。

私は起きあがって、ゆっくりとナツミのほうへ近づいていった。

そのとき私は、目が覚めていたけど、やっぱり夢を見ていたのだ。自分でなにをしているのか理解していなかったのだと思う。ほんとは「たすけてくれてありがとう」と、お礼を言おうとしたはずなのに……。

私がいざなうとした行動はちがっていた。

自分の唇をナツミの唇に重ねた。

長い時間ではない。ほんの一瞬。ちよつと接触しただけ。

でも、ナツミのやわらかい唇の感触は十分に伝わってきた。

唇を放すとき、ナツミが小さく息を吸いこんだ。しばらく間があり、ナツミは体をそむけてしまった。

「ごめん……怒った？」ナツミがそっぽを向くのを見て、後悔の念が襲ってきた。なんでこんなことをしたの？ 自己嫌悪に陥った。

ナツミから返事はなかった。自分の布団にもどった。私は目を開けたまま、天井を見ていた。目をつむるのが怖かった。

一方で、ナツミがそばにいるという安心感もあった。

——ナツミがいるから大丈夫。いざとなったら〈塩〉を投げればいい。そう思いながら目を閉じたとき——。

「怒ってない」

ナツミがきっぱりとした口調で言った。

## 6

朝、目が覚めると、ナツミの姿はすでになかった。ナツミの寝ていた布団は、部屋の隅にきちんと畳まれていた。私を起こさないように細心の注意を払ってくれたのだろう。その気遣いが心に沁み込んだ。

昨日のことは夢だとしか思えなかった。部屋に現れた天使。そして、ナツミとのキス……。

朝食の時間になり、フユミさんが料理を運んできた。昨夜、夕食を持ってきてくれた

のはナツミだったのに……。私があんなことをしてしまったから、顔を合わせづらいのかな……。ナツミは、もう私と会いたくないのかもしれない。

お昼前には、旅館を発たなければならぬ。それは、ナツミとも別れることを意味する。

——そんなの嫌だ。

私のなかで焦燥感が高まる。なんとかかしないと決けない。でも、どうすればいいの？ 他人の気持ちを自由にできるはずはないのに……。

## ○

玄関のところまでやってくると、イスに腰かけ、本を読んでいる人がいた。

ナツミだ。ブックカバーの赤色が目に飛びこんでくる。

ん？ あの川にいた少女もおなじものを持っていなかったっけ？ でも、いまはそんなことはどうでもいい。

会いたかったはずなのに、動揺してしまう。話しかけていいのかな？ ナツミは私に近づいているのに気づいているの？ 気づいたら、去ってしまうの？

無意識のうちに、歩幅を狭めていた。結果を先延ばしにしたいという欲求が働いた。

ナツミが本から目を離れた。私に気づいた？ ナツミが私のほうを見る。「おはよう」ナツミがあいさつをする。屈託のない笑顔。ぎこちなさは微塵も感じられない。少なくとも私との関係は壊れていないのだと思う。

「おはよう……」嬉しいはずなのに、沈んだ声になってしまった。

「今日も観光するんですよ？」

「うん、そのつもりだけど……」

楽しめそうもない。ここで旅館をあとにして、ナツミにさよならを言ってしまったら、そのあとは、ただ悶々としながら過ごすしかないのでは……。

「今日は、郡上八幡城に行こうよ」ナツミが笑顔のまま言った。

「え？ 今日も案内してくれるの？」

「うん。無理にとは言わないけど……」

どうする？ ナツミと少しでも長くいられるのなら、こんな幸運はない。でも、そこそ重要な結論を先延ばしにするだけかもしれない。そのぶん、悲しみが深くなるだけなのでは……。

返事ができず考えこんでいると、「じゃあ、待ってて」と言っ、ナツミはどこかに消えてしまった。

「あ……」また孤独感がわきあがってきた。

受付でフユミさんにお金を払いおわっても、ナツミはもどってこなかった。

ナツミの座っていた場所に、赤いブックカバーがかけられた本が置きっぱなしになっていた。

どんな本を読んでいるのか興味がわいた。でも、勝手に見るのはよくない。そんな良心よりも、好奇心のほうが勝った。

一瞬の躊躇ののち、本を手にとった。

『テンシが貴女を愛の世界へ導く本 S・タカコ／著』

本の表紙にはそう書かれていた。

天使？ ナツミはこの本に影響されて、あんな考えを持ったの？  
だれかが小走りに近づいてくる音がしたので、あわてて本を元にもどした。



旅館の玄関を出ると、空気が少しひんやりとした。さわやかな朝だった。

フユミさんと大女将さんが見送りに出てきてくれた。私はお礼を言いながら、お辞儀

をして、旅館をあとにした。ナツミという予定外のパートナーを伴いながら……。

## ○

郡上八幡城をめざして、山道をのぼっていく。昨日、天使の祠まで行くのにおつた道だ。

昨日は道中に会話はなかった。いまもひとことふたこと他愛もないことを話すだけで、言葉数は少ない。ふだんの運動不足と寝不足がたたったのか、ちよつと歩いただけでも息があがつてしまったので、おしゃべりをする余裕がなかったのも事実。でも、ナツミとの間にまだわだかまりがあったのかもしれない……。

天使のことを話題にする気はなかった。あまり愉快な会話にはならないという予感がある。

昨晚のキスのことを謝ったほうがいいかな、と一瞬考える。「怒つてない」というナツミの言葉は、本心なのか、私を気遣ってくれたのか、それとも、気まずさを取りのぞくための方便なのか……。

予想していたより早く郡上八幡城にたどりついた。ふたりで天守閣まで黙々とのぼった。ここから郡上八幡の街が一望できる。

「この街はね、魚の形をしてるんだよ」

「へ〜」さすがにこの高さから見ても、魚には見えない。でも、東西に横長に広がる街だということはよくわかった。

「あ、ごめん」ナツミがそう言うと、おもむろに「電話」を取り出した。バイブの振動する音が聞こえている。ナツミが画面に表示された発信者をたしかめる。

「ごめん。いい？」ナツミが申し訳なさそうにたずねる。

「うん……」私はうなずいた。

ナツミとの会話をさえぎられたのが気にいらなわけじゃない。いま私の気が晴れないのは、ナツミの電話の相手がだれなのか、猛烈に知りたかったから。

「やだ、ダメ、仕事中だよ」

ナツミの少し弾んだ声がかんたえる。楽しそう。ナツミの幸せそうな表情を見るのは悪い気がしないけど、同時に疎外感も覚える。

「ごめんね」ナツミが「電話」をしまいながら言う。通話時間は一分にも満たなかったはずだから、私に遠慮してくれたのはまちがいない。でも、「仕事中」という単語に引っかかった。

——たしかに正しいよね。ナツミにとってこれは仕事なんだから……。

ナツミにわからないよう息を大きく吸いこんだ。

「ねえ、ナツミ、私と付きあってくれない？」私は前置きなしに切り出した。

「……」ナツミは私の顔をじっと見つめたまま、しばらく沈黙していた。

私にとっては無限とも思える時間が流れた。

「……わたし、もう付きあっている人いるから……」

うん、わかってた。そうだと思ってた。だから、ほんとうに付きあってももらえるとは思ってなかった。でも、そのことをちゃんとたしかめずに、東京に帰れなかったから。

「ありがとう」私は虚勢を張りながら言った。「きつぱり断つてくれて」

「わたしも、マヨのことは好き。美人だし、優しいし、こんな素敵な人はいないと思う。でも、ふたりの人と同時に付きあうのは、どっちも傷つけることに——」

「いいよ、ナツミ。平気だから」私は明るさを装って言った。いや、心に巣くっていたモヤモヤがとれて、なぜかさわやかな風が私のなかに吹いていた。

「さ、行こう」私はナツミをうながした。

○

列車が到着するまで、20分ほど時間があつた。私たちは駅舎のイスに腰をおろした。

「これ……」ナツミがバッグからなにかを取り出した。あの天使の祠で見た、和紙でつ

くられた人形だった。

「これって……？」

「まだ〈テンシ〉の魂を封じこめていない人形。よかつたら記念に……」

「ありがとう。大事にする」その人形をナツミだと思つて……。

列車を待つ人たちがホームのほうへ向かいはじめた。

「じゃあ、私行くね」立ちあがりながら、ナツミのほうを見ると、ナツミの目が潤んでいた。そして、一筋の涙が頬を伝う。

「ナツミ……」そうつぶやきかけたとき、ナツミが突然私に飛びついてきた。

唇が私の頬にあたる。

「さよなら……」耳元でそうささやくと、ナツミは駅舎を出ていってしまった。私はその場に呆然と立ち尽くしていた。

列車の近づく音がする。その音で我に返る。

「おねえさん、早く！ 出発しちゃうよ」駅員さんが私に声をかける。

「あ……すみません」

ホームに出ると小豆色の2両編成の列車が止まっていた。

走って乗車口に滑りこむ。車両の中央付近の席に座ると、列車が汽笛を鳴らし、動きだした。

郡上八幡の街から徐々じょじょに離れていく。  
窓から見える木の緑や水の青は、私の目には白黒の映画を見ているようだった。  
ナツミにわたされた人形を取り出した。風景ではなく手元のそれをしばらく眺ながめていた。

私の乗った長良川鉄道なごらがわがゆつくりと、ゆつくりと走る。  
夢見がちな女を、じつくりと、日常の世界へと引きもどすために――。

### そして物語はつづく……

東京にもどったあとも、私はナツミのことが忘れられなかった。だから、スピリチュアルカウンセラーのもとへ、恋愛相談おとしずに訪れた。そこで出会ったのは、郡上八幡ぐじょうはちまんに現れたあのバケモノだった――。

私はもう逃のがれられない。(テンシじゆばくの呪縛から。そして、みずからの恋心から……。

\*この物語はフィクションです。登場する人物・団体・建造物等は、実在のものとは関係ありません。

### 参考文献

山野肆朗しろう 『長良川をたどる 美濃から奥美濃、さらに白川郷へ』(ウエッジ)  
下川耿史げいし 『盆踊り 乱交の民俗学』(作品社)



## 『天使の街〜マヨ〜』製品版の1)案内

このたびは、『天使の街〜マヨ〜』サンプル版をご覧いただきありがとうございますとついでございます。このサンプル版には、本編の序盤の内容を約20%収録しております。物語の続きに興味がありましたら、ぜひ製品版をご講読ください。

また、『天使の街』には、本書の姉妹編『天使の街〜ハルカ〜』もございます。のちにマヨの教え子となるハルカの視点から一連の出来事が描かれています。こちらもあわせてお読みいただきますと、より深く物語世界に浸ることが出来ます。

さらに、オフィシャルサイトでは、さまざまなコンテンツをご用意しています。こちらもぜひお楽しみください。

天使の街・オフィシャルサイト

[tensi-no-match.info](http://tensi-no-match.info)

天使の街～マヨ～ サンプル版

2014年5月25日 1・0版 発行

著者 夜見野<sup>やみの</sup>レイ

キャラクターデザイン・イラスト ミナセ

校閲 鷗来<sup>おうらいどう</sup>堂

出版者 米田政行

発行所 ぎゃふん工房

gyahunkoubou.com

mail@gyahunkoubou.com

©2014 YAMINO Rei/GYAHUN Koubou